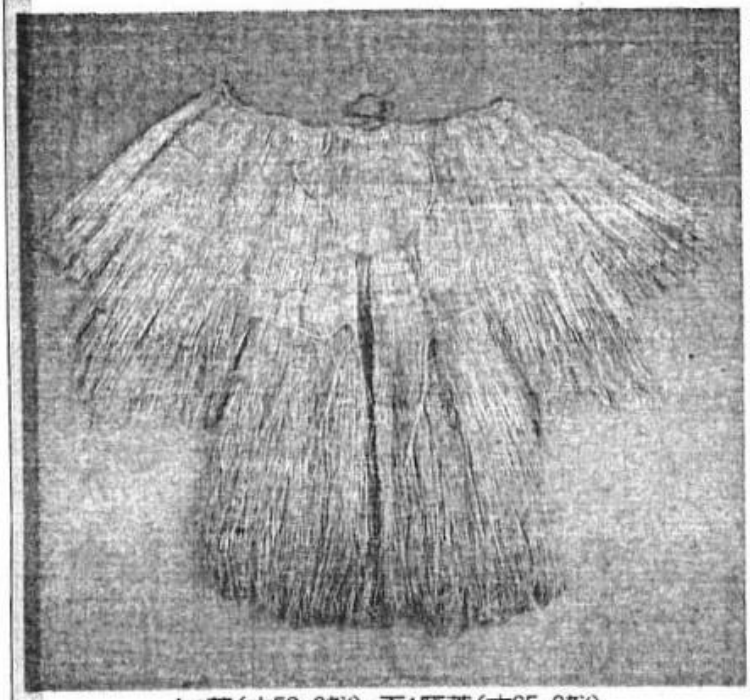
びわ博コレクション

おうみ漁具図鑑

40 蓑

すぐ乾く雨具、前掛けも



上：蓑（丈58.0㌢）、下：腰蓑（丈65.0㌢）

下着の襦袢のうえに絣の着物。夏は一重、秋は二重もんの袷を着て、黒い三尺の帯をしめる。下は季節を問わず、足首まである股引パッチをはく。これが戦前までの沖島（近江八幡市）の男性の漁師の出で立ちである。

労働着に欠かせないものに、腰から下を覆う「前掛け」がある。沖島の場合、男性は藁でできた腰蓑を巻いた。西居正吉さん（85）に聞くと、明治38年生まれの父親の世代にはまだ腰蓑が現役だった。冬、船上で網を引き上げたりしていると蓑に水がかかり、その水が凍って藁の先につららが下がってくる。正吉さんはそんな冬の光景をみた最後の世代である。

船上の漁師の履きものは、素足に藁製の草履と決まっている。当然、冬には足先が冷える。雪が降るような日は、昼に茶をわかした湯で暖をとった。「草履が冷たいやろ、ほしたら、その残った熱い湯をざあっと草履に掛けはんねや。火にあたってるわけにもいかんしね、そのときに足を温めはるねん」

雨の日には、やはり藁製の蓑を背負った。短い期間だが、正吉さんは雨具の蓑を身に着けたことがある。学校をおえて地引網のメンバーに加わるとき、蓑を2枚、近所の器用な人に頼んで新調したという。

地引網は夜中の12時から出漁し、早朝の6時に戻ってくる。梅雨の時期など、藁が雨水を吸って重い。「座っても横になっても、ぎゅっと肩に食い込んでね、（脱いでも）まだまだ蓑きてるような感じやった」というくらい、蓑の重さが疲れた身体に残る。ところが雨の日は漁獲があがるので、一服したあと昼からまた漁に呼ばれることがある。濡れた蓑はまだ乾いていない。重いし、身体にも悪い。そんなときに2枚目の蓑が役に立ったのである。

濡れる仕事の多い漁師にとって、陽にあてればすぐ乾く藁製品は重宝した。雨具のカッパにビニール製の前掛け、ゴム長靴といった、いまの漁の必需品は、じつは戦後に相次いで登場したものである。戦後の生活革命は、衣服を和服から洋服に変えただけでなく、文字どおり頭から足の先まで一新してしまったのである。

（琵琶湖博物館主任学芸員　渡部圭一）

＝隔週木曜掲載です